

# 液状化する地域研究

—移動のなかの北東アジア—<sup>1</sup>

## Liquid Area Studies

North East Asia in Motion

テッサ・モーリス - スズキ\*

Tessa Morris-Suzuki

---

This article uses the historical example of Mount Kūmgang as a starting point for an inquiry into the possibility of a North East Asian regional perspective. Through choosing a specific place and investigating the changes to the network of routes through which that place is connected to the wider world, we can find out both significant things which concern the region as a whole and learn how regions themselves have changed historically.

What I wish to propose in this article is the need to rethink the concept of an "area" (or "region") that has served as a kind of received presumption for all Area Studies to date. If we consider "areas" as places that exist purely on the basis of human action such as travel, commercial trade and communication, then any individual "area", rather than being something fixed and imbued with geographical roots, becomes more like a fountain constantly changing shape. From this "Liquid Area Studies" perspective we can gather that, firstly, "areas" can adopt a plurality of forms; secondly, that often "areas" overlap each other; and thirdly, that "areas" are never eternally unchanging. The approach of liquid area studies focuses on "flows" and "vortices" as two factors related to the interactions of human beings.

History shows that it is people who make areas. In other words, areas are made through both large-scale political strategies as well as an infinite number of small-scale connections made by normal people engaged in travel and exchange

---

\* オーストラリア国立大学教授

across national borders. In all kinds of places – not only North East Asia – the flows and vortices of human interaction which create areas can be violent or peaceful but they are always made and supported by human efforts. The future of Mount Kūmgang as one example of one of these whirlpools of human action which has continued to change over a thousand years of history is in the hands of the people of the region and has the power to influence either the integration or breakdown of the region as a whole.

### はじめに——金剛山

2008年7月、韓国のパク・ワンジャという女性が、朝鮮半島の分断線のすぐ北側に位置する金剛山クムガンサンの観光地で海岸を散歩していた際に、北朝鮮の国防軍によって射殺された。彼女の死は、北朝鮮と韓国両国の関係に危機をもたらした。2000年から金剛山クムガンサン（日本語では金剛山こんごうさん、英語圏ではダイヤモンド・マウンテンズとして知られている）は、北朝鮮当局と韓国の現代グループ共同の観光開発事業の用地となっていた。パク・ワンジャの死はこのリゾート地の閉鎖へとつながり、それは、金大中政権キムデジュンおよび盧武鉉ノムヒョン政権の「太陽政策」から生じた南北の共同事業が近年後退していくうえでの、重要な一歩となったのである。金剛山でのこの事件は、日本のメディアおよび国際的なメディアで広く報じられた。だが、金剛山の長くそして興味深い歴史についてふれた報道はほとんどなく、この発砲事件のニュースを見たどれだけの日本人が、金剛山が日本自体の文化史に深く埋め込まれていることに気づいているのか、疑問に思わざるを得なかった。

本報告では、金剛山の歴史の事例を、北東アジアの地域的視座を探究するための出発点としたい。偶然興味をひかれたところがあるため、この例の選択はやや恣意的なものである。だが、この歴史の小さな片隅は、複数の論点を際立たせるのに役立つ。特定の場所を選び、その場所とそれとをとりまく世界とを結びつける経路のネットワークの変化を探究することによって、その地域全体に関する興味深い事からや、その地域自体が歴史的にどのように変化してきたかを知ることができるだろう。地域を見るための拠点として地図上で注目されるのは、首都や主要な貿易港かもしれない。しかし、金剛山のような、宗教上、芸術上、そして観光上の巡礼地でもある場所もまた、その地域の人びとと思想とが変化する流れフローを考察するうえで優位な視点を提供してくれる。また、金剛山は、日本と近隣の北東アジア地域との、しばしば忘却されてきた歴史的なつながりを思い起こさせる要素を持っており、興味深いところでもある。し

たがって本報告は、金剛山から眺めた北東アジアの性質について述べてゆく試みである。

## 北東アジア——不完全な地域

2003年、アメリカの社会学者ギルバート・ロズマンは、『北東アジアの発達不全な地域主義』と題した著書を刊行した<sup>2</sup>。この文献は、1990年代からの北東アジアにおける政治的・経済的な統合過程について、それを阻害する要因を注意深く分析するものである。だが、そのタイトルは、この地域の内外両方でさまざまな記述のなかに広く繰り返されてきた、北東アジアに関する認識を表している。西ヨーロッパが、共有された歴史と価値に基づく統合モデルを提供すると広く考えられているのとは対照的に、北東アジアは、不完全かつ不十分で、なぜか失望させられる地域であるとしばしば描写される。政治学者のロバート・スカラビノは、北東アジアの統合に関して、ロズマンよりもはるかに楽観的な展望を持っているが、彼でさえも(いわば当然の成り行きとして)「文化的、政治的、経済的な差異は、現在西ヨーロッパで見られる程度の統合を、不可能にしている」と述べるのである<sup>3</sup>。

第二次世界大戦の終戦以降の西ヨーロッパでは、「地域的アイデンティティの成長は、制度の構築(institutional building)と信頼の構築(confidence building)とに関連づけられて」きた<sup>4</sup>。しかし、アジア太平洋戦争の終戦から60年以上経過した後でも、北東アジアは(しばしば思い出されるように)あいかわらず深く分断されているように見える<sup>5</sup>。東南アジアとの比較も、好意的でないものが多い。東南アジア諸国がASEANにおいて共通点を見出した一方で、北東アジアは、とりわけナショナリズムの力によって分断されたままなのである<sup>6</sup>。じっさい北東アジアにおけるナショナリズムの堅固さは、ケント・カルダーが述べてきたように、この地域が「地球上もっとも危険な場所のひとつ」として広くまなざされる理由のひとつである<sup>7</sup>。この観点からは、金剛山は、北東アジアの危険なところのすべてを象徴するものとしてみられることだろう。すなわち、世界で唯一残存する冷戦の境界線に隣接しており、二つに分断された、未だに解決を見ない南北朝鮮関係の発火点である——そして、この不安定な関係がこの地域全体の運命を形づくる力を持っているのである。

このような背景に対して、北東アジアの地域主義に関する近年の議論は、地域統合の失敗に関する説明、あるいは少なくとも弱点に関する説明を探求することに焦点を当ててきた。(ロズマンのような)一部の研究者が、近年の政治的・経済的動向にこれらの説明を求める一方で、それらを歴史や文化のなかにより深く埋め込まれているものとして考える研究者もいる。たとえば韓国の世宗研究所セジョンの金聖哲キムソン Cholは、次のように主

張する。すなわち、「北東アジアの独特な歴史的経験は、いくぶん19世紀的な前 - 近代的国家の側面と、20世紀的なバランス・オブ・パワーの対立、そして21世紀のポスト - 近代的な多国間秩序の混じりあった、奇妙な混合体という結果を生んできた。この特性は、北東アジアがヨーロッパのような地域共同体を形成することをより困難にするであろう」、と<sup>8</sup>。

本報告では、北東アジアの不完全な地域主義の原因をめぐる論争に加わるのではなく、その論理を(いわば)逆手に取りたいと思う。換言すれば、北東アジアがなぜ「発達不全な地域」のままであるかを問うよりも、北東アジアの歴史を例として用いて、地域研究がまさにその「領域 (region)」や「地域 (area)」という考えを概念化する方法を問うていきたい。この20年以上のあいだに、地域研究を社会的知へのひとつのアプローチとみなす研究が多くなされてきている。地域研究という方法の価値と限界に関する論争は、しばしば東南アジアから経験的事例を引いてきた。新たに、北東アジアを「地域 (area)」として見ることは、(わたしが信ずるに) 21世紀の地域研究の可能性と限界に関していくつかの有用な洞察を与えてくれるだろう。

## 地域研究をこえて

地域研究はアメリカ合衆国とその同盟諸国の大学において、冷戦期の1950年代から1980年代にかけて隆盛をみせた。しかし1980年代からは、地域研究という方法はさまざまな方面の深刻な難問に直面してきた。いくつかの批判によれば、世界の特定の地域(たとえば東南アジア、アフリカ、ラテンアメリカ)に注目する領域横断的な研究単位の創造が、ディシプリンに立脚した学術研究の衰退をもたらし、それが学問的な厳密さの欠落につながってきたという<sup>9</sup>。

批判を受けるようになった二つ目の要因は、地域研究が、とりわけアメリカにおいて、国家戦略立案に関与する政府機関からの潤沢な資金援助を受けながら、冷戦の戦略と密接に結びつくようになってきたことであつた。その結果として、地域研究のアジェンダは、(主張されているように)国家によって絡め取られてしまう危険につねにさらされている<sup>10</sup>。もちろん、地域研究をアメリカの戦略的かつつなげておくという欲望は、ヨーロッパでの冷戦終結とともに消失したわけではない。たとえばアメリカ陸軍大学による近年の出版物は、このような伝統が今日においてもいかに強く存在しているかをはっきりと例証している。同校が2004年に出版した北東アジアに関するある論文は、アメリカ(そしてとりわけアメリカ軍)がこの地域で「国益を防御し維持することを成功裡に続ける」ために、北東アジア諸国の文化を理解する必要があると強調しているのである<sup>11</sup>。

そうした取り組みを補佐すべく、この論文の筆者は次のように説明を続ける。西洋の人びとについては、「科学的な方法が、常に我々の発見の手段であり、もっとも基礎レベルで我々の行動に影響を与えてきた」と述べ、北東アジアの人びとは、それとは異なり「つい最近まで科学的方法の影響を受けてこなかった」文化を持っている、と述べる<sup>12</sup>。西洋の人びとが(我々がそう言われているように)個人主義的であるのに対し、北東アジアの人びとは集団志向であるため、「北東アジアのリーダーに接近することは、その文化全体に接近すること」なのである<sup>13</sup>。したがって中華人民共和国のような国を扱う際には、この筆者は次のように強調する。すなわち、「かれらの行動を予想したり影響を与えたりするために、論理や因果関係を用いることはできない。かれらは経験主義に基づいており、結果に向けて行動するという論理は重みを持たない。中国に経験主義的にアプローチし、時とともに自然が正しい結論を生むだろうと考えるかれらの見解を取り入れることは、我々の成功の機会を増進させるだろう」と<sup>14</sup>。このような研究が示しているのは、文化研究と軍事戦略の継続的な結びつきばかりではない。地域研究を悪名高いものしてきた、文化を本質化し均質化する1950年代風の文化に対する捉え方が、驚くほどの耐久性をもっているということである。

しかしながら、学界のほとんどのところでは、地域研究は、北東アジアにおける個人主義の欠落または科学的合理性の欠落などといった大雑把な一般化をはるかに超えた地平へと進展してきた。ポストコロニアル研究やカルチュラル・スタディーズに影響されて、地域研究はより自己再帰的になり、自らの方法論を問い直すようになった<sup>15</sup>。覇権的な西洋が非西洋地域の「他者(Other)」を観察し分析する学問領域であるよりも、むしろ、多様な声と視座が一定の位置を占める、トランスナショナルな試みへとますます変わりつつある。

だが、重大な概念に関する難問はいくつか残っている。もっとも重要な課題は「地域」それ自体の性質——換言すれば、人間社会と地理的空間とのつながり——を問題にするものである。地域研究は慣習的に、「地域」についてかなり静的な認識に立脚してきた。すなわち物理的地理と環境に包含され、共有された文化によって定義される空間というものである。また別の表現でいえば、平原、山地、河川、海洋といった地理的条件は、ある特定の人びとの集団を他の人びとの集団から切り離す一方で、特定の集団同士を互いに深く接触させると考えられてきた。千年以上ものあいだ、こういった共有された地景のなかで、人びとはそれぞれの自然環境に適合した文化のパターンを発達させた。フランスの歴史家フェルナン・ブローデルが述べたように、「文明を議論することは、空間、土地とその輪郭、気候、植物、在来の動物、そして自然やその他のメリットを論じることである。そのことはまた、人間がそういった基礎条件をど

のように考えるのかを議論することでもある」<sup>16</sup>。地域研究は、共有された地域的な文化の根本的な特徴と、それらがその地域の人びとの社会的・経済的・政治的運命に与える影響とを明らかにしようとする試みのなかで、歴史学や地理学・人類学・言語学・社会学などの分野からの見識を集めながら、文化あるいは文明の領域に焦点を当てた。終戦直後の数十年のあいだの数多くの研究は、それぞれの文化的領域を特徴づける価値や信仰、思想の根底的なパターンを明らかにする試みに注がれた。なぜなら、(再びブローデルを引用すると)「日常の出来事に対する社会の反応は・・・論理の問題ではなく、自己の利害の問題でさえなく、言葉にされない、またはしばしば言葉にできない、集合的無意識に由来する強制に対する応答」であるという考えが広く受け入れられていたからである<sup>17</sup>。

しかしながら、より最近の研究は、空間や社会・文化に関するこのような見方に対し、根本的な問いを投げかけてきている。たとえば地域研究の「地域(area)」は、通常ヨーロッパや南アジア、アフリカなどといった大陸や亜大陸、または連続する土地のまとまりである。だが、浜下武志やバーバラ・ワトソン・アンダヤといった研究者の議論が示すように、このアプローチは、海や大洋によって生み出されてきた非常に重要な人びとのつながりを無視するものである<sup>18</sup>。歴史的に世界の多くの地域での往来は、陸路よりも海路のほうが容易であり続けてきた。この結果として、互いに長い距離で隔てられている漁村や港町の人びとをつなぐ長距離貿易ルートが生み出されてきた。これらの無視されてきた海洋のつながり(maritime connections)に再び注目するならば、地域文化に関する静的かつ本質化された見方を再考せざるを得なくなる。港町の人びとは、内陸地の人びとと何らかの文化的共通点を有しながらも、海の向こう側の遠方の交易相手とも、何らかの文化的特徴を共有しているかもしれないのである。

海洋の世界はこうした交易路にとりわけ富んでいるが、また別の往来航路も、広く散らばったコミュニティからやってくる人びとのあいだに経済的関係と文化的共通性を作り出しながら、大陸や砂漠を横断する。古代から16世紀のあいだに出現しては消えたいくつもの中央アジアのシルクロードは、そのような内陸航路の例である。さらに他の事例は、複数の地域と大陸とに渡る宗教巡礼の道である。金剛山は、朝鮮半島東岸の比較的近づき難い険しい地域であるが、そのような巡礼ルートが持つ力の一例である。険しい山々と壮大な景観は、金剛山という場所を、仏教寺院の建設のために、あるいは瞑想や芸術的創作を目的に世間から隠遁するために、好ましい場所にした。数多く建ち並ぶ寺院のうち最初のものかいつ造られたのかということは、厳密には知られていない。だが、朝鮮への仏教伝来の比較的直後である新羅王朝時代(紀元前57年から紀元935年)の半ばまでには、この地域は、朝鮮半島全体だけでなく中国

でもよく知られた巡礼の中心地となった<sup>19</sup>。元の皇帝が1348年に、この山地のなかでももっとも高名な寺院である長安寺チャンアンサの再建に貢献したと言われている。また、20世紀中頃、その近隣の楡帖寺ユシヨムサは、10世紀以上前にトクハリスタン(現在のウズベキスタン、タジキスタン、アフガニスタンにまたがる中央アジアの王国)から伝わったものも含め50体もの仏像を有していた<sup>20</sup>。

海洋と通商と旅のルートへ注意深く目を向けることは、社会と文化と空間の関係について、より動的で流動的な見方を作り出す。地理のなかに埋め込まれ、それゆえに千年以上も不変であったように見えるのではなく、文化的領域は、動的かつ重複的で、人びとの移動と交流によって継続的に創造され再・創造されるものとして見えてくる。その結果、空間の見方は、フェルナン・ブローデルの世界観よりも、彼と同時代に生きたアンリ・ルフェーブルの世界観に、より影響を受けるものになる。もちろんルフェーブルは、社会空間はそれ自体として存在するものではなく、常に社会的実践によって創り出されるものであると主張した「空間の生産」についての鋭い考察で記憶されている。だが、現代世界において、資本主義の実践は、空間の特定の形態を創り出す一方で、これらの空間が自然なものであると人びとに確信させるように働く——空間は人びとの行為の産物であるという事実を隠すために、である。換言すれば、空間は構築されるものであり、大いに観念的なものなのである<sup>21</sup>。

この空間の構築というより深い感覚は、ひとの移動をめぐる学術的な関心がますます高まっていることと関連している。社会に関する研究が、静的状態をこそ人間の正常な状態であると伝統的に考えてきたのに対し、現在は、人間社会はそれ自体、移動(ナショナルな国境を横断する移動と国内移動の両方を含む)によって構築されていると強調する研究が豊富な成果をあげている。たとえば伊豫谷登士翁は「方法としての移民」という論考のなかで、移民を、定住生活という「規範」に対するひとつの逸脱とみなす考え方を問い、とりわけ、そのような考え方ゆえに移民を国家権力による管理の焦点とみなすまざしに対して異議を唱えている<sup>22</sup>。伊豫谷が示唆するのと同様に、移民研究者によって一般的に提起されてきた問いを逆さにすると良いかもしれない。つまり、何が人びとを移住に駆り立てるのかを問うのではなく、その代わりに、いかなる特別な条件がある人びとの集団をそこにとどまらせるのか、と問うてみるのである。

## 地域——フロ流れと渦

そうした試みは、「液状化する地域研究(liquid area studies)」と呼び得るような方法への扉を開いた。「液状化する地域研究」の出発点となるのは次のような考え方であ

る。それはすなわち、「地域(area)」というのは、旅行や通商やコミュニケーションといった人間の活動によってのみ存在するようになる、という考え方である。比較的長距離を越えての相互の交流を通じて人びとは、生活スタイルや認識に関する共通性を発見したり作り出したりする。そうした共通性のなかには、新しく生み出されるものもあるが、過去に存在していたつながりを再発見または再創造することによって生み出されるものもある。

言い換えるなら、ある地域というのは、地理的な基層に埋め込まれた固定的なものというよりも、絶え間ない運動や変化によってのみ形づくられる噴水のようなものである。噴水と同じように、動きが方向を変えたり停止したりすると、地域は、形を大きく変化させたり完全に消失したりする。地域は人間の行為や動きによって構成されるというこうした考え方は、以下のようないくつかの帰結を導く。第一に、「地域(area)」は非常に多様な形態をとり得る。地域は、広大な、拡がりをもった土地に住む人びとを結びつけることもあるが、空間的には互いに遠く隔たった地点同士を結びつける連環から構成されることもある。第二に、「地域(areas)」は重なりあっているかもしれない。つまり、人びとが互いに隣接して生活するからといって、必ずしも互いに取り引きや交流をしたり考え方を共有したりしているとはかぎらない。同じ街や地方のなかにも、さまざまな集団が存在する可能性があり、それらの集団が、それぞれの社会的空間で生活し、ゆえに異なった地域に属しているということもありうる。第三に、液状化する地域研究は、どんな地域における文化的な一体性や統合でも、それらが長期間にわたって何の変化も蒙ることなく存続するという想定に対して、いかなる根拠も提供しない。いくつかの場所では、安定的な相互関係がかなり長期間存続する「地域」を生み出すこともありうるが、別の場所では、「地域」の輪郭や性質といったものは非常に流動的で、時間の経過にもなまって繰り返し劇的な変容を蒙ることもある。

液状化する地域研究というアプローチは、その領域を画定する地理的な境界や文化を形づくる環境条件を探求することから始めるのではなく、人間の相互作用に関わる二つの要素に注目するところから始める方がより有益であろう、ということを含意している。その二つの要素とは、「流れ」と「渦」である。周知のことではあるが、流れとは、社会的集団同士を結びつける人やモノや觀念の動きのことである。それは、移民の動きであつたり貿易のルートであつたり、巡礼の道であつたり、あるいは軍隊の進退によって刻み込まれた足跡であつたりするだろう。社会的・文化的な地域というものは、そうした流れが豊富に流れ込み交差することによって形成される。

他方、渦とは、複数の流れが交じり合う場所である。そこでは、旋回する社会的お



よび文化的な相互作用が渦巻きを作り出している。それは、複数の貿易ルートが交差する都市や島であるかもしれないし、あるいは競合する政治的諸勢力が接触と衝突を繰り返す戦略的な重要拠点であるかもしれない。さらには、さまざまな遍歴を背負った信仰者たちを惹きつける巡礼地のような場所かもしれない。海流がぶつかり合うところがそうであるように、そうした渦巻く場所というのは、とくに栄養豊富であることが多く、生命を維持し、(この場合には)社会的・文化的な変化の種を育てるのに適している。しかしながら、流れが歴史のなかで変化すると同様に、渦もまた歴史のなかで変化する。活発な出会いの場であり貿易の拠点であった場所も、移動や通商の道筋が変われば重要性を失って衰退し、やがて見捨てられてしまう。そして、新しい流れと渦が別の場所にあらわれてくるのである。

### 変わりゆく北東アジア——中華世界

液状化する地域研究という概念は、北東アジアの動向を理解するためのひとつの視座を与えてくれる。数世紀にわたってこの地域は、統合と分解の時局をくぐり抜けてきた。そのたびに地域の輪郭と力学は変容してきた。くり返し訪れる地域的な紛争や分裂によって、地域を結びつける流れは断ち切られてきた。統合の局面を再生させるためには、古いつながりを修復し、新しいつながりを作り出す必要があった。このように北東アジアという地域は、永久に再建され再創造されつづけているのである。そうした再創造のうねりを迎えるひとつの方法は、特定の渦に収束する流れが時間のなかでいかに変化してきたのかを考察していくことである。

明王朝(1368-1644)から初期清王朝(17世紀中頃から18世紀まで)までの中華北東アジアは、朝貢ネットワークによってつながっていた。朝貢ネットワークは、地域の遠隔地を中華帝国の首都に結びつけていただけではなく、江戸やソウルといった都市や満州の齊齊哈爾のような貿易拠点を、内陸地と結びつける機能をも果たしていた。こうした流れの構造はまた、現在のベトナムの北部にあたる安南といった地域やベトナムの首都である東京(今日のハノイ)——そうした地域は通常、今日の地域研究では東南アジア地域の一部であるとみなされる——までをも含むほどに広がっていた。

地域の統合が最高潮に達したとき、移動ルートのこうしたネットワークは濃密で複雑なものとなっていた。朝鮮からの朝貢使節は、たびたび朝鮮半島を北上し満州を抜け、明の首都である北京を目指した。それは、朝鮮がますます中国に依存するようになったということではなく、朝貢に赴くことは使節にとっても利益が大きかったという事実をあらわしている。中国は、琉球王国や安南のさらに先まで広がった複雑かつ多民族的な知的ネットワークを維持していた<sup>23</sup>。他方、中華帝国のアジア海域とのつ

ながりの多くは、寧波ニンポーのような東部の港を通じて行われた。寧波の港は、朝鮮半島南部や日本の南西部の港湾都市と密接に結びついていたのである<sup>24</sup>。

明朝時代、日本と大陸アジアとのあいだの交流が活発になるにつれて、宗教や学問や芸術の相互作用が促進された。そのおかげで、(たとえば)毛筆画家として有名な日本の僧侶である周文(1414-1463)が仏教の経典を求めて朝鮮へと渡ることが可能となったし、周文の朝鮮人の同僚で彼と同名であった李周文イジュムンの日本への渡航も実現したのである。日本人の周文が実際に金剛山を訪れたかどうかは分からないが、彼は間違いなくその存在については知っていたし、実際に眼にしていなくとも脳裏に浮かぶその景色は、日朝二人の周文が日本に持ち込んだ風景画に影響を与えていた。周文は、朝鮮の寺院に滞在するあいだに、中国からもたらされた宗教的または芸術的な思想に接したことだろう。それらは朝鮮の僧侶や使節によって——北京へ向かう者たちは北へ、あるいは寧波行きの貿易船に乗り込む者たちは南へと旅立っていった——持ち帰られたものであった<sup>25</sup>。

実のところ、宗教的な巡礼地へのルートは、しばしば貿易や外交のルートと合流していた。周文のもっとも有名な弟子であった雪舟(1420-1506)が放浪した旅程は、このことをよく例示している。雪舟は、1460年代に、山口と寧波とのあいだの密接な通商関係を利用して寧波経由で北京に向かっている。さらに、雪舟は日本に帰国するまでのその後の二年以上にもわたって、北京から、天津、南京、蘇州やその他の中国各地を訪れている。その後彼は、日本の風景画の発展に甚大な影響を与えることになる豊かなアイデアを抱えて帰国したのであった<sup>26</sup>。

北京のような都市や寧波のような港はそれゆえ、たくさんの方向からの流れフローがぶつかり合う渦であった。雪舟のように放浪する僧侶や画家は、たとえば北京のような都市においては、中国人だけではなく朝鮮人の使節や芸術家とも出会っていたであろうし、さらには(おそらく)安南や中央アジアから来ていた旅人も出会っていたことであろう。金剛山もまた、小規模ではあるが、そうした地域的な流れフローのなかの渦であった。金剛山の僧侶たちは、朝鮮や中国の他の有名な巡礼地へと旅立っていったし、また、僧院を維持していくために必要な施しを求めて放浪の旅に出たのであった<sup>27</sup>。他方、巡礼の地としての(百を超えるといわれた)金剛山の寺院は、信仰深い仏教信者ばかりでなく、著名な儒学者であった権近クオンクン(1352-1409、陽村という名でも知られていた)のような、有力な朝鮮の高官などをも魅了した。外交使節として北京へと向かうのと同じように、権近は金剛山においては思索の時を過ごした。朝鮮王朝の成立直後である1396年には、金剛山で一篇の詩を含む文芸作品を書き上げている。そのなかで彼は、「突兀岡巒」(切り立った絶壁の山)の頂上に立って「俯視鴻濛」(つまり天地の混沌を

見下ろしている)自分自身の姿を描き出したのだった<sup>28</sup>。17・18世紀頃までには、そうした宗教的な旅または思索にふける旅は、いよいよ近代的な観光の特徴を帯び始めることとなった。金剛山のように有名な場所は、訪問の記録を書き記した朝鮮人学者たちの作品や、鄭敦<sup>チヨンソン</sup>(1676-1759、謙齋<sup>キョムジエ</sup>という名でも知られていた)や金弘道<sup>キムホンド</sup>(1745-1806、檀園<sup>タンウォン</sup>という名でも知られていた)といった著名な画家たちが多く描き出した連峰のイメージによって広く知れ渡っていたのである<sup>29</sup>。

巡礼地に関連した絵画や文芸作品を見てみると、そうした場所自体が、時間のなかで伸縮するネットワークにどのようにつながっているのかを理解することができる。アジアへと侵入する西洋人の数が増加するにつれて、さらに壬申戦争<sup>イムジン</sup>という惨劇につづいて、かつては安南、琉球王国、そして日本から朝鮮、中国までの地域を横断していた移動の流れは、より厳しく制限されるようになっていった。宗教的な巡礼は繁栄を続けていたが、地理的により狭い圏域の内部へとだんだん閉じ込められていく。清朝の力が衰えるにつれて、中華北東アジアを支えてきた流れ<sup>フロー</sup>のネットワークが徐々に衰退し、地域の一体性も崩れていった。

#### 帝国主義と再統合——1880年代から20世紀中葉まで

ところが、19世紀の後半期に突入した頃から、新しい相互作用のパターンが生じてきた。それらは、西洋の存在、地域内でのナショナリズム運動の勃興、そしてとりわけ日本の帝國的な拡張主義の力によって深く規定されていた。20世紀初頭にあらわれた、この新たな日本中心の北東アジアは、「統合」が必ずしも慈悲深く、平和的で、平等主義的なわけではないという事実を想起させる。「統合」には、暴力や権力のヒエラルキーがともなうこともあり得るのである。

北東アジアにおける日本の支配は、一般には日清戦争(1894-1895)と日露戦争(1904-1905)として知られている二つの戦争における日本の勝利によって確実なものとなった。しかし、(わたしが別のところで論じたことであるが)これら二つの戦争は、「第一次朝鮮戦争」と呼ぶことのできるような一連の紛争過程として考えるのが最もよいであろう(というのも、この紛争の根元には朝鮮半島の支配権をめぐる争いが横たわっており、実際の戦闘の多くもまた朝鮮において行われたからである)。この第一次朝鮮戦争での日本の勝利の結果生じた、北東アジアにおける新しい移動ネットワークは、より以前の中華秩序のそれとは大きく異なっていた。重心が東へと移ったことにより、安南のような南の地域はいまやフランスが支配するインドシナの植民地世界に併合されていった。北京のような主要都市の影響力が衰えた一方で、大阪、上海、大連を含むその他の都市が、再形成された地域の新たな渦として登場してきた。

こうした近代北東アジアを形づくる人やモノや知の<sup>フロー</sup>流れは、鉄道に代表されるようなインフラストラクチャーの新しいネットワークに沿って動いていった。朝鮮鉄道(朝鮮人技師によって着手されたものだが、日本人植民者によって完成された)や南満州鉄道と多岐に渡るその支線は、第一次朝鮮戦争の結果として得られた主要な戦利品に含まれていたものである。これらの鉄道はまた、さらに広大なネットワークの一部にもなっていた。世界の両端にトンネルが開通し、東京とロンドンが直接に鉄道によって結びつく日がやがて訪れるであろう(と夢見られていた)というものである。第一次世界大戦とロシア革命は、そうした夢が決して実現しないことを保障したわけであるが、朝鮮鉄道と南満州鉄道は、新たな北東アジアという地理的身体の隅々にまで栄養を送り届ける動脈となっていた。

鉄道というのは言うまでもなく、金属や土木工事あるいは駅や時刻表を意味するばかりではない、政治的な権力でもあった。南満州鉄道会社のある従業員が述べていたように、「満州へと侵攻した日本帝国主義は、鉄道会社というかたちを取ることにした」のであった<sup>30</sup>。鉄道は、日本の商人や兵士や開拓民を大陸全土に運んだだけでなく、中国や朝鮮からの移民を満州へと送り込んだ。また日本人の芸術家や文学者を運び、かれらは朝鮮や中国を旅して回った。さらに朝鮮や中国の学者たちを運び、かれらは仕事や勉強のために日本へと渡った。それゆえ鉄道は、暴力の手段であったのと同時に、平和的な知の交換手段ともなっていたのである。鉄道ネットワークは、朝鮮の民族主義を抑え込むために日本の警察を送り込んだ。しかしまた朝鮮のナショナリストたちも、朝鮮と満州のあいだを(ときには変装して)行き来するために列車を利用していった。パク・ヒョンオクが『同床異夢——帝国、社会生活、そして満州における北朝鮮革命の起源』において鮮やかに描き出したように、帝国主義によって作り出された新しい流れの<sup>フロー</sup>ネットワークは、支配者と被支配者の双方の幅広い諸集団によって思わぬかたちで利用され、拡大されることになったのである<sup>31</sup>。

金剛山という小宇宙は、新しい地域力学の特徴のいくつかをよくあらわしている。19世紀の衰退と頽廢の時期をへて20世紀の前半には、金剛山の寺院は、旅人たちの<sup>フロー</sup>流れを再び呼び寄せる場となっていた。今度の旅人たちは、世俗の巡礼者たちであった。そうした訪問者の出自や、かれらが金剛山にやって来るまでに辿る道というのも、14・15世紀の巡礼者が最盛期であった頃とは様変わりしていた。1910年に日本が韓国を公式に併合した後、新しいフェリーの航路が確立されたことによって、金剛山は<sup>ウオンサン</sup>元山という港町と結びつき、さらに1931年に金剛山電気鉄道が設立されたことにより、日本の管理下の朝鮮鉄道および南満州鉄道のネットワークと結びついていった<sup>32</sup>。そうした輸送の接続の発達は、朝鮮と満州をめぐる観光コースの目玉として金剛山を

選別するという植民地政策の一環であった。金剛山への観光は、日本人だけでなく外国人旅行者にも熱心に宣伝された。1925年から1938年のあいだに、金剛山への年間訪問者数は200人以下から24,000人以上にまで増加した<sup>33</sup>。そうした訪問者の多くは朝鮮内部や日本からやって来ていたが、なかにはアメリカ合衆国やヨーロッパからやって来る観光客もいた。金剛山はまた、ホテルや茶店を経営する植民者、さらに三井やその他の日本企業によって導入された林業や鉱業で働く労働者といった、日本人の長期滞在者をも惹きつけたのだった。

20世紀の前半期にこの連峰を目の当たりにした日本の芸術家や文学者にとって、金剛山というのは、スイスのアルプスが19世紀ヨーロッパのロマン主義的空想のなかで占めていた地位と似ていなくもなかった。先駆的な新聞編集者であり社会評論家でもあった徳富蘇峰(1863-1957)は、金剛山の比類なき美を賞賛する詩を詠んでいる<sup>34</sup>。また他方で、石井栢亭(1882-1958)や丸山晚霞(1867-1942)、さらにその他の20世紀初期の風景画家たちが、その驚くべき景観を描くために日本からこの山岳地帯へとやって来ている。1930年代までには、金剛山を、瀬戸内海や雲仙普賢岳や富士箱根地区といった場所と並べて、国立公園に指定しようとする計画が日本において進行中であつた。それらの場所はすべて1931年の国立公園法という新しい法律によって指定されていたのだが、戦争によって中断され、計画は水泡に帰したのであつた<sup>35</sup>。

このように、金剛山を日本中心の北東アジアの新しい流れ<sup>フロー</sup>に再び結びつけることは、過去の再発見と忘却との両方を含んでいた。観光客にとって、この地域の主要な魅力のひとつは、古代の仏教寺院や僧院、仏像や石造りの彫刻作品などが多いことであつた。彫刻は、より昔の世代の巡礼者たちによって刻まれたものである。だが、この連峰を訪れる日本人のなかに朝鮮王朝の時代の詩人や画家の作品を思い起こした人びともいたものの<sup>36</sup>、観光に関する多くの日本の書籍は、これらの遺産についてふれていなかった。(驚いたことに)いくつかの観光本は、1890年代に金剛山を訪れたイギリス人の旅行家イザベラ・バードがそのときこの連峰を「発見」したものとみなしている——朝鮮の旅行家や詩人や芸術家たちによって描かれた、金剛山に関するより以前の無数の記録などまるで存在したことがなかったかのように、である<sup>37</sup>。

このような記憶の消去は、物質的な搾取と密接に関連しながら進んだ。とりわけ搾取の対象になったのは数多くの朝鮮人労働者で、鉄道を建設するため、または観光客の荷物を運ぶ「クーリー」として、雇われた。じつさいに観光客自身を絶壁の斜面まで運ぶこともしばしばあつた。その一方で、パク・ヒョンオクが満州における中国人・朝鮮人・日本人のコミュニティ間の相互関係に関する議論で示すように、植民地化の権力によって作られたシステムは、植民者たちが完全に統制できるものではなかった。

ますます増加する学生グループを含めた朝鮮人観光客もまた、自らの歴史や文化を再発見するために、日本の植民地主義によってつくられた鉄道やホテルを利用したのである。このような再発見の興奮が、(たとえば)1938年にキム・オクソンによって、ある学生向け雑誌のために書かれたエッセイのなかに鮮やかに描かれている。彼女は咸興ヘムフンの街の女学生で、教師やクラスメートと一緒に、金剛山の電気鉄道をつかって仏教遺跡を見学するため金剛山を訪れたのだった<sup>38</sup>。観光客の目的地というものはまた別の金剛山の役割としては、多国籍の人びとの出会いの場というものがあり、これはアメリカのジャーナリスト、ヘレン・フォスター・スノウの回顧録に描かれている(彼女はニム・ウェールズというペンネームでも書いている)。スノウは1936年に、「日本を嫌い、アジアで唯一重要なプロテスタントのコミュニティである朝鮮に対して特別な責任を感じている無口な宣教師」とともに、日本が経営する内金剛ホテルのペランダにいたときのことを思い返している。この出会いはのちに、スノウに朝鮮人の独立闘争の闘士たちとの接触をもたらし、彼女は著書『アリランの歌』のなかでかれらのことを共感に満ちた叙述で描いている<sup>39</sup>。

これらのさまざまな旅の経験は、1910年代から1940年代初期までの北東アジアの帝国主義的な多文化主義の、ある重要な特徴をあらわしている。近代の地域の新しいフロー流フローは、上海、奉天(今日の瀋陽)、丹東といった民族的に多様な都市と、そこでの中国人、日本人、朝鮮人、ロシア人、そして西洋人のコミュニティを作り出したのである。しかし、水と油のように、それぞれのグループは隣接して流れていたが、混じり合うことは滅多になかった。それゆえに大町桂月や石井柏亭、与謝野晶子(1928年満州訪問)といった日本人旅行者たちは、満州と朝鮮のあちこちを移動し、日本人の著名人を訪問したり日本経営のホテルを利用したりして、その周囲の景観ゆえにはあるが、ほとんど完全に「日本」であるところに滞在したのであった。

## 冷戦の数十年——1945年-1980年代

1945年の日本帝国の崩壊は、北東アジアに対して、20世紀前半の数十年のあいだ地域をつないでいた結び目の突然の決壊をもたらした。この地域を引き裂いた分断の力は、戦後ヨーロッパを分断したものよりもじつに複雑で根が深いものだった。ヨーロッパは西側と東側を分かつ一枚の「鉄のカーテン」によって分裂させられたが、カーテンの西側においては、越境的な移動が比較的容易であり、また、文化的なコミュニケーションは豊かだった。冷戦の分断によって二つに分けられたにもかかわらず、ヨーロッパは、第二次朝鮮戦争(1950-1953)で北東アジアが経験したような、新しい超大国間の武力衝突という「熱い戦争」は経験しなかったのである。

北東アジアにおける亀裂は複雑なものだった。38度線は、冷戦の複数の分断線のひとつに過ぎないものになっていったが、そのうちもっとも長く続いていることが明らかである。1960年の中国・ソビエト間の決裂はこの地域に面してまた分断線を作り出し、冷戦の秩序は、北東アジアの非共産圏の部分においてまで、ナショナルな諸社会を孤立させいくつもの家族を分断するような境界線を作り出した。アメリカの軍隊の傘の下で、「共産主義者による転覆」のあらゆる脅威を封じ込めようという試みは、韓国と台湾と日本のあいだ、そして沖縄と日本のあいだの、人びとの移動を厳しく制約することを含んでいた。他方、中国、北朝鮮、ソ連の東部では、共産主義政府が、国際的な越境だけでなく、自分たちの国境の内部においてまでも、人びとの移動に厳しい管理を施したのだった。

この分断された世界のなかでは、イデオロギー的な対立はいくつもの激しいナショナリズムに重ねられ、文化の場もナショナル化されイデオロギーを傾注されていった。金剛山は、朝鮮戦争のなかでももっとも激しい戦いのいくつかを経験した。長安寺は韓国とアメリカ合衆国の戦争捕虜たちの宿営所に使われ、のちに近くの楡岾寺のように完全に破壊された。連峰は、東京とソウルからだけでなく、南にわずか15キロメートルの花津浦ファジンポのような村からでさえ、にわかにな寄りたいたいものになった。山々の景観と芸術的な遺産(少なくとも戦争を耐えたもの)は、世俗的な巡礼地として残っているが、今ではほとんどすべての訪問者が、北朝鮮の国境の内側から訪れる人びとである。1960年代のあいだ連峰には労働者の休養施設が発展し、共産党の幹部だけでなく、一般の人びとが金剛山の景色と新鮮な空気の中で息抜きをするためにそこを訪れた。わたしが会話を交わしたことのある、北朝鮮からのひとりの難民は、1966年に金剛山で休日を過ごしたとき楽しんだ美味しい食事と心休まる景色のことをいまでも喜びとともに覚えている。彼は、新義州シンウイジュという北部の国境沿いの町にあった工場から金剛山を訪れ、金日成キムイルソンの体制が北朝鮮の人びとに約束し最終的に与えることのできなかった、より裕福な生活というものをわずかに覗かせてもらえたのであった(金剛山の労働者の休養施設は、1960年代の末あたりからは、一般の労働者にとっては近づけない場所になったようである)<sup>40</sup>。険しい山の風景はやがて帝国主義に対する朝鮮の頑強な抵抗の象徴となり、昔の訪問者たちによって何世紀ものあいだ残されてきた彫り物に並んで、党首金日成の言葉の引用が石々に刻まれた。連峰に近づくことのできる外国人は、数少ない高位の公式訪問者のみである。興味深いことに、非常に少ない冷戦期の日本人訪問者のなかには、著名な芸術家丸木位里と丸木俊の名があった。かれらは、北朝鮮政府によって、画家雪舟の没後450年を記念するための1956年の式典に招待されたのであった<sup>41</sup>。

## 再統合への長い道のり——1980年代以降

わたしたちは21世紀の最初の10年の終わりを、そして日本による朝鮮併合から100年を迎えようとしている。北東アジアの人びとは、いまも、冷戦によって困難になった地域的な<sup>フロー</sup>流れを漸進的に再創造する過程のなかにある。1980年代以降、ソビエト連邦の崩壊と中華人民共和国の変革は、地理的には互いに隣接しているもののイデオロギーの障壁によって何十年も分離させられてきた、いくつもの場所同士がみごとに再び結びつく道を開いてきた。これらの新しい<sup>フロー</sup>流れを支える物理的なインフラストラクチャーは再び変容してきている。今では、高速道路、鉄道および航路とともに、空路が主要な役割を果たしている。

地域内の通商は1990年代初期から2004年までのあいだに約6倍に増加し、とくに中国と韓国が北東アジアとの貿易関係を拡大している<sup>42</sup>。この過程において、複雑な相互依存のパターンが現れた。韓国の商業貿易はいま非常に多くを中国に向けており、2007年までに中国は、韓国にとって最大の輸出市場であり主要な輸入先になった。日本にとっても、中国はやはり2007年までに主要な輸入先となり、(アメリカに次いで)二番目に大きな輸出市場となった。非常に輸出志向の経済である中国にとって、最大の輸入先は日本であるが、輸出市場としては日本は4番目で、ヨーロッパ連合やアメリカ合衆国に引き離されている。中国の急速な経済成長は、この地域内の巨額の投資の<sup>フロー</sup>流れを支え、またそれによって支えられた。海外直接投資の中国への年間流入額は2002年から2007年のあいだに4倍以上に増加し、日本や韓国、台湾からの地域内投資によって生み出された中国のシェアも非常に大きい<sup>43</sup>。しかしながら統合のレベルは、国によってだけでなく地方によっても異なっている——たとえばロシアとの国境に近い中国の北東地方は、ロシアとの投資関係のうえでの貿易に多くを依存しており、他方、南東地方はアメリカのような遠く離れた市場を志向している。

それと同時に、国境を横断する旅行者と移民の地域的な<sup>フロー</sup>流れが現れており、ある人びとは、ひとの移動のより古い道筋を再びたどり、また他の人びとは新しい経路を作り出している。植民地時代に満州に移住した人びとの子孫である朝鮮族の人びとは、数多くが韓国へと移住しており、また朝鮮民主主義人民共和国には約15万人が住んでいると見られている。中華人民共和国の北部から移住した中国人約25万人がいま東ロシアに居住しており、そのうちのほとんどは近年移住した人びとである。中国の人びと、とくに東海岸出身者は日本に移住し、日本における中国系の居住者はいま60万人ほどに達している。その数は、つい最近の日本における外国人登録者において、朝鮮・韓国系の人びとをしのぎ最大となった<sup>44</sup>。数多くの韓国学生が中国に留学し、中国からの多くの学生が日本のカレッジや大学で学んでいる。日本人の若い世代は大



連や上海で職を探している。何万人もの北朝鮮の人びとが中国に向けて、危険な非登録のままの越境を試みており、貿易のために国境を行き来する人びともいれば、より永続的な避難を故国の外に求める人びともいる。21世紀初頭までに、北東アジアにおける国際的な移住者は1900万人に達したと見積もられていた<sup>45</sup>。

国際的な観点でみれば、またこの地域の人口規模の割には、この数は決して大きいものではない。だが、赤羽恒雄とアンナ・ワシリエヴァが指摘するように、「大きな変化が進行中であるという徴しが、この地域の至るところにあらわれている。北東アジアのあらゆる国で、ますます多くの一般的な市民が、近隣の国々を旅する必要や欲望を感じるようになり、そしてじっさいそれが可能であることを知っている。かれらのなかにはホスト社会に永久に定住する決断をする者もいれば、移住労働者として一時的な雇用を見つける者、単純に観光客として旅をする者もいる」<sup>46</sup>。

北東アジアの地域的な流れの新しい波は、グローバル化と、とりわけ中国東部を中心とする市場経済の成長とによって、支えられてきた。しかしこれらの流れは、二つの主要な要素によって遅滞させられ、複雑にされている。その二つの要素はいずれもグローバルな波及効果を持っており、そのひとつはグローバルな市場経済の不安定さである——これは、2008年の終わりに株式市場が暴落したことによって、もっともスペクタクル的に明らかになった。二つ目は、朝鮮半島に存続している、いまだ未解決の冷戦の断片である。それが社会的・経済的な接触を妨害し、危険が絶え間なく続くような空気を作り出しているのである。

地域研究の伝統的アプローチは、このようなつながりを、共有された文化という基層のうえに築かれるものと捉えがちである。それとは対照的に、液状化する地域研究というアプローチは、これらの流れがいかにか今日の経済的・政治的・社会的な力によって生み出されているかを強調する。貿易や移住、旅行によって創り出される接触こそが、人びとを、文化のおよび歴史的な共通性の探求や再発見、再解釈へと導くのである。このような視座からみれば、21世紀の最初の数年間に、金剛山が新しい人びとの流れに対して開かれたことは、現在の北東アジアにおける再統合にとって可能性と危機の両方を例示するもののように見えるだろう。2000年に北朝鮮政府と現代峨山ヒョンデ・アサン（韓国の現代グループに属する企業）とのあいだで契約が結ばれたのち、連峰は、主に韓国からの観光客を対象にした巨大な観光施設の用地となった。この観光地は、外交会議や、冷戦によって長く引き裂かれていた朝鮮人家族の再会のために利用され、この新しい共同事業は、将来北朝鮮を漸進的に地域に再統合するための先駆的な試みであると考えられた。観光客が自由に現地の人びとと交流することに対しては厳しい監視が敷かれたが、これら金剛山への新しい巡礼者たちは、北朝鮮出身のガイ

ドやホテルで働く人びとと出会い、話をする機会を持ち、また、連峰の素晴らしい景色だけでなく、その周りの北朝鮮の地方の風景をみる機会をも持ったのだった。これらの素朴な人間的な触れ合いは、間違いなく、二つの朝鮮を隔ててきた数十年間の恐怖や敵意を徐々に崩していく助けになった。韓国の人びとが金剛山にガイドまたは観光客として、あるいは小さな店や飲食店を経営するためにやってくる一方で、中国からの朝鮮族の人びともまた、この事業のために集められてきていた。韓国と北朝鮮と中国からの朝鮮人の人びとが一緒になったとき、かれらは、この連峰の芸術的な遺産のなかに詰められている古代の共有された歴史を再発見したのだった。

しかしながら、この再・記憶(re-remembering)のなかでは、金剛山電気鉄道の植民地世界や、金剛山を訪れた大正時代の日本の芸術家や文芸家のことなどは、ほとんど完全に忘れられていた。この忘却は、21世紀の最初の数年のうちに進んだ統合の重要な局面において、日本がほとんど不在であったことを反映していた。1970年代から1980年代の北朝鮮による日本市民の誘拐が露わになって以来、怒りと敵意によって立ち止まった日本政府と日本の企業は、「北朝鮮アレルギー」のようなものを発展させ、貿易と海外投資に向けて北朝鮮を漸進的に開いていく試みに参加することを避けるようになったのである。金剛山へのツアーには日本人観光客も参加したが、その人数は非常に少なかった。2008年5月にわたしが金剛山を訪れたとき同行した100人ほどの観光客のなかには、少数のヨーロッパ人が交じっていたが、日本人はひとりもいなかった。この不在は、より大きな不在を象徴しているように思われる。すなわち、日本が北朝鮮に関する六ヶ国協議に参加するのに乗り気ではないことや、地域の政治的および経済的相互関係に関する重要な課題のために、日本が積極的な役割を果たすことについて全体的に躊躇していることである。

したがって、この地域への金剛山の実験的な再統合は、地域統合に対してアンビヴァレントな日本の取り組みを際立たせることになった。他にもうひとつ、この観光事業によって浮き彫りにされた地域統合に関する重要な特徴は、その成長がまさに地域統合を支えていた市場経済によって作り出された、大きな経済的・社会的不平等であった。韓国の観光客と北朝鮮の現地の人びとは、非常に不平等な関係で、金剛山にて出会ったのである。観光施設の目映い四つ星ホテルは、栄養不良と慢性的なエネルギー不足に悩まされて暮らす人びとに取り囲まれ、孤立した地区に立っていた。ゆえにこの観光事業は、地域の再統合が進むなかで取り囲まれるべき重大な社会的・経済的・政治的問題を縮図的に示していたのである。2008年7月の金剛山での発砲事件の背後には、<sup>イミコンバク</sup>韓国の李明博政権が積極的な関わりをやめ冷戦の政策を復活させるという劇的な政治的転換と一緒に、このような深刻な不平等が要因としてあったのかもしれない。

この悲劇的な事件が協働と交渉とによって対処されるのではなく、その代わりに事業全体の打ち切りに帰着したことには、確かにいくつかの理由があったのである。

## 来るべきかたち

今日、かつて権近が「天地の混沌」を見下ろした山頂から北東アジアを眺めてみるならば、わたしたちは、ひとつの地域を再び、流動と不確かさの契機のなかに見るだろう。経済危機と南北間の新たな緊張は、過去20年のあいだの漸進的な再統合からの後退をもたらすのだろうか。金剛山の観光事業が打ち切られたことは、協働から新たな対立へという流れ(tide)の転換のひとつをしるすものなのか。それともこのことは、一時的な中断、つまり北東アジアの冷戦を最終的に終結させるための険しい道りにおけるひとつの躓きに過ぎないということになるのだろうか。

歴史が示しているのは、人びとが地域をつくるということである。すなわち地域は、大きな政治的戦略をとおして、また、国境を越えて旅や交流をする普通の人びとによって織り込まれる無数の小さなつながりをとおして、つくられるのである。ここで概観した地域へのアプローチは、北東アジアの地理や文化、歴史には、より大きな統合を妨げる本来的なものなど何も無いということを示唆している。それだけでなく、統合への模索は、儒教や集団意識といった時間を超越した共通価値への訴えかけに頼ることはできない、ということをも示唆している。北東アジアだけではなくあらゆる場所で、<sup>フロー</sup>地域を生み出す流れや渦は、暴力的なものも平和的なものも含む人びとの力によってつくりだされ、支えられている。歴史は、わたしたちがそこから結びつき、もしくは対立を生み出す、素材を提供してくれる。

たくさんの方から来る海流がぶつかりあう渦は、流動的な地域において、とりわけ不安定な地点である——それは新しい生活と大混乱の紛争との、両方を生み出すことができる。金剛山のようなひとつの渦の将来は、変わり続けてきたその千年の歴史とともに、その地域の人びとの手のなかにあり、このような小さないくつもの渦の行方が、将来におけるこの地域全体の統合または解体に影響を及ぼす力を持っているのである。

---

### [注]

- <sup>1</sup> 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター主催国際シンポジウム「トランスナショナル／トランスカルチュラルな比較地域研究」(2009年2月14日・15日)講演原稿。
- <sup>2</sup> Gilbert Rozman, *Northeast Asia's Stunted Regionalism: Bilateral Distrust in the Shadow of Globalization*, Cambridge, Cambridge University Press, 2003.
- <sup>3</sup> Robert A. Scalapino, "Northeast Asia Today: An Overview", p.1. presented at the seminar

- "Human Flows across National Borders in Northeast Asia, November 20・21, 2002, United Nations University, Tokyo", The Center for East Asian Studies, Monterey Institute of International Studies, Monterey, California.
- <sup>4</sup> Logan Wright, review essay on Rozman's *Northeast Asia's Stunted Identity*, *Yale Journal of International Affairs*, Winter/Spring 2006, pp.172-175.ここではp.172からの引用。
- <sup>5</sup> Qi Zeng, "The Clash of Nationalism in Northeast Asia in the Transnational Context", in *Building a Stable Northeast Asia: Views from the Next Generation*, special issue of *Pacific Forum CSIS Issues and Insights*, Washington DC, Center for Strategic and International Studies, vol. 5, issue 12 September 2005, pp.1-49, 1-51, ここではp.1-49からの引用。
- <sup>6</sup> 北東アジアにおけるナショナリズムの問題に関しては、たとえばRozman, *Northeast Asia's Stunted Regionalism*, op. cit. (注1)、およびQi, "The Clash of Nationalism", op. cit. (注5)を参照されたい。
- <sup>7</sup> Kent Calder, "The New Face of Northeast Asia", *Foreign Affairs*, January-February 2001, pp.106-121.
- <sup>8</sup> Soung Chul Kim, "Multilateral Security and Economic Cooperation in Northeast Asia", *Sejong Seongchek Yeongu*, vol. 4, no. 2, pp.225-297, 2008. ここではp.226からの引用。
- <sup>9</sup> たとえばBenedict Anderson, "Studies of the Thai State: The State of Thai Studies", in E. Ayal ed., *The State of Thai Studies*, Athens, Ohio, Ohio University Center for International Studies, Southeast Asia Program, 1978, pp.193-247.
- <sup>10</sup> たとえばImmanuel Wallerstein I, "The unintended consequences of Cold War area studies", in Noam Chomsky et. al eds, *The Cold War and the University*, New York New Press, pp.195-232.
- <sup>11</sup> Larry B. Rogers, *Northeast Asia: Cultural Influences on the US Security Strategy*, Carlisle PA, US Army War College, Strategic Studies Institute, 2004, p.v.
- <sup>12</sup> 前掲(注11) Rogers, *Northeast Asia*, p.4から引用。
- <sup>13</sup> 前掲Rogers, *Northeast Asia*, p.7から引用。
- <sup>14</sup> 前掲Rogers, *Northeast Asia*, pp.11-12から引用。
- <sup>15</sup> たとえばPeter Jackson, "Space, Theory and Hegemony: The Dual Crises of Asian Area Studies and Cultural Studies", *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia*, no. 18, pp.1-41.
- <sup>16</sup> Fernand Braudel, *A History of Civilizations*, London, Penguin Books, 1995, p.10.
- <sup>17</sup> 前掲(注16), Braudel, *A History of Civilizations*, op. cit., p.22.
- <sup>18</sup> たとえば浜下武志編『東アジア世界の地域ネットワーク』国際文化交流推進協会, 1999. Barbara Watson Andaya, "Oceans Unbounded: Transversing Asia across 'Area Studies'", *Japan Focus*, 17 April 2007. 次のURLを参照されたい。 <http://japanfocus.org/products/details/2410> <2008年10月2日アクセス>
- <sup>19</sup> Yu Hong-Jun, "Geumgangs an ui Yeogsa wa Munhwa Yusan", in Yu Hong-Jun ed., *Geumgangs an*, Seoul, Hakgojae, 1998, pp.11-38を参照。とくにpp.29-30.
- <sup>20</sup> 徳田富次郎『金剛山写真帖』徳田写真館, 1918.
- <sup>21</sup> Henri Lefebvre, *The Production of Space*, (英訳Donald Nicholson-Smith), Oxford, Blackwell Publishing, 1991.
- <sup>22</sup> Iyotani Toshio, "Migration as Method", in Iyotani Toshio and Ishii Masako eds., *Motion in Place / Place in Motion: 21<sup>st</sup> Century Migration*, JCAS Symposium Series 22, Osaka, Japan Center for Area Studies, 2005, pp.3-16.
- <sup>23</sup> Shih-Shan Henry Tsai, *The Eunuchs in the Ming Dynasty*, New York, State University of New York Press, 1995.

- <sup>24</sup> Takeshi Hamashita, "Tribute and Treaties: Maritime Asia and Treaty Port Networks in the Era of Negotiation", in Arighi, Selden and Hamashita eds., *The Resurgence of East Asia*: op. cit., pp.17-05. とくに p. 19. また Jay Levenson ed. *Circa 1492: Art in the Age of Exploration*, Yale, Yale University Press, 1991, p.386を見よ。
- <sup>25</sup> 前掲(注24), Levenson, *Circa 1492*, op. cit. p.386.
- <sup>26</sup> 芸術家と旅行に関しては、たとえば Sherman E. Lee, "Art in Japan 1450-1550", "Korean Painting of the Early Choson Period", いずれも前掲(注24) Jay Levenson ed. *Circa 1492: Art in the Age of Exploration*, Yale, Yale University Press, 1991, pp.215-328および pp.333-336を見よ。
- <sup>27</sup> 施しを集めるために僧侶を送り出すという慣習は、仁川のような都市においては19世紀後半においてもまだ存続していた。"Report by Mr. C. W. Campbell of a Journey in North Korea in September and October 1889", *British Parliamentary Papers, China* (no. 2), 1891, p.9を見よ。キャンベルは金剛山への訪問に関する詳細な記述を書き残した最初の西洋人であり、(19世紀のヨーロッパ人の偏見は避け難いものではあるが)彼の報告は、その地域に関する重要な情報源としての価値がある。キャンベルはまた、金剛山の素晴らしい写真を何枚か撮っている。その写真は、彼自身の報告ではなく、George N. Curzon, *Problems of the Far East: Japan-Korea-China*, London, Longmans, Green and Co. 1894に取められている。
- <sup>28</sup> Kweon Keun, "Geumgangsán", in Ten poems on prescribed themes, 22nd of this month (15th day of the 9th month, 29th year of Hongwu/15 September, 1396); translation by Dane Alston. わたしにこの詩のことを教えてくれたのは Dane Alston であった。
- <sup>29</sup> Kim Dong-Ju ed., *Geumgangsán Yuramgi*, Seoul, Jeontong Munhwa Yeonguhoe, 1999を見よ。文学者による金剛山への旅の記録は、以下のものを含む。Nam Ho-Un's *Yugeumgangsán* (1485), Seong Jaeweon's *Yugeumgangsán* (1531), Yi Seong-Gu's *Yugeumgangsán* (1603), Kim Chang-Hyeop's *Dongyugi* (1671), Seok Beob-Jong's *Yugeumgangsán* (1670).
- <sup>30</sup> 引用は後藤新平の言葉である。伊藤武雄『満鉄に生きて』(東京、勁草書房、1964年) trans. Joshua Fogel, *Life along the South Manchurian Railway: the Memoirs of Ito Takeo*, Armonk, M. E. Shapre, 1988, p. 5を見よ。
- <sup>31</sup> Park Hyun-Ok, *Two Dreams, One Bed: Empire, Social Life and the Origins of the North Korean Revolution in Manchuria*, Durham NC, Duke University Press, 2005.
- <sup>32</sup> コンゴウというのは金剛という名称の日本語読みである。金剛電気鉄道は、1923年から1931年の8年間にわたって建設が行われた。金剛電気鉄道株式会社『金剛電気鉄道株式会社三〇年史』(東京、金剛電気鉄道株式会社、1939年)を見よ。
- <sup>33</sup> 金剛電気鉄道株式会社『金剛電気株式会社三〇年史』前掲(注32)、p.70.
- <sup>34</sup> たとえば、満鉄京城鉄道局編『朝鮮金剛山』(東京、満鉄京城鉄道局、1924年) p.2を見よ。
- <sup>35</sup> 前掲(注34 pp.165-166. また P. F. Brovko and N. I. Fomina, "The History of Establishment of the National Park Network in Countries of the Asia-Pacific Region", *Geography and Natural Resources*, vol. 29, no. 3, September 2008, pp.211-225; Ministry of the Environment, Japan, "National Parks of Japan" 次のURLも参照されたい。 [www.env.gov.jp/en/nature/nps/park/welcome/index.html](http://www.env.gov.jp/en/nature/nps/park/welcome/index.html) <2008年12月9日アクセス>
- <sup>36</sup> たとえば徳田富次郎の『金剛山写真帖』を見よ(注20)。
- <sup>37</sup> Department of Railways, Japan, *An Official Guide to East Asia: Vol.1-Chôsen and Manchuria*, Tokyo, Department of Railways, 1920, p.86.
- <sup>38</sup> Kim Ok-Seon, "Keugangsán Tamseunggi" (1938), Kim Yeong-Seok et al., *Sinyeoseong, Gil uie Seoda*, Seoul, Homi, 2007, pp.29-38に再掲載されている。

- <sup>39</sup> Helen Foster Snow, *My China Years: A Memoir*, New York, Morrow, 1984, p.186.
- <sup>40</sup> ソウルでの個人的な対話から(2005年6月20日)。
- <sup>41</sup> "Name List of Japanese Supporting North Korean Policies and/or Visiting North Korea (as noted in Radio Pyongyang broadcasts 16 August 1956 to 15 May 1957)", In Australian National Archives, series no. 1838, control symbol 1303/11/91 Part 1, *Japan – Relations with North Korea*.
- <sup>42</sup> 前例は2003年の状況である。
- <sup>43</sup> UNCTAD, *World Investment Report 2008*, New York and Geneva, United Nations, 2008. とくに p.2。
- <sup>44</sup> Immigration Control Bureau, Ministry of Justice (法務省入国管理局), Japan, *Migration Control 2008*. 次のURLを参照されたい。http://www.moj.go.jp/NYUKAN/nyukan80.html<2009年10月29日アクセス>〔上記は英語版。日本語版は、平成21年版「出入国管理」http://www.moj.go.jp/NYUKAN/nyukan78.htmlを参照のこと〕
- <sup>45</sup> Tsuneo Akaha and Anna Vassilieva, "Introduction: Crossing National Borders: Human Migration Issues in Northeast Asia", in Tsuneo Akaha and Anna Vassilieva eds., *Crossing National Borders: Human Migration Issues in North East Asia*, Tokyo, United Nations University Press, 2005, pp. 1-7. p.2から引用。
- <sup>46</sup> 前掲(注45), Akaha and Vassilieva, "Introduction: Crossing National Borders", op. cit., p.2から引用。

(訳：松村美穂・山岡健次郎・小野塚和人)